

る。直接日常的に関わる親子間では、戦争体験のような悲惨な体験を語ることはできず、むしろ一世代空け、ある時期を経て語ることである。今回の琴の語りは、まさに孫だから聞き取れたということもあるのではないか。そして、同時に子世代（著者の親世代）への聞き取りも十分なされており、記憶の齟齬などの箇所を並列させることで、語りの差異を、あえてそのまま提示することで、今後の読者たちによる分析にも役立つと思われる。

なお、些細なことになるが、一読者としては、五二―五三頁のような詳細な家系図とは別に、琴および夫の栄の親族を含めた登場人物が明確に分かる簡略化した人間関係図および、琴に関連する略年表があれば（本書4・5章を読み進めるときに）、より分かりやすくなっただろうと思った。

さて、上記のように、本書の貢献は多岐にわたる。引用していただいた拙著刊行後、この方面でまとまった成果を示せていない評者には、まさに叱咤激励を受けた気がしたと正直に述べなければならぬ。民俗学・文化人類学を専門とし、口頭伝承や祭祀行事研究等で重要な成果を挙げてきた著者が、分野を超えた形で本書を刊行するまで、女性のキリスト者の生活史が、（個別教会史の一部や逝去後に著される記念誌等以外に）このようにまとまって（一般読者を想定して）示されたことはほとんどない。著者と琴さんに心より感謝したい。

櫻井治男著

『地域神社の宗教学』

弘文堂 二〇一〇年一月一五日刊
A5判 viii+三八四+ii頁 五〇〇〇円+税

由 谷 裕 哉

本書は、『蘇るムラの神々』（大明堂、一九九二年）に続く、櫻井治男氏（一九四九年生まれ、皇學館大学教授）の二番目の単著である。

構成は全四編からなり、第一編の前に全体の構成を位置づける序が置かれている。以下に、章のサブタイトルを省略したうえで、構成の詳細を示すことにする。

序

第一編 近代日本と地域神社への視角

第一章 近代日本の神社信仰と地域社会

第二章 明治初期の「神社」調べ

第三章 明治初期の「神社」調べと地域神社

第二編 神社整理と地域の神社復祀

第一章 「家郷」をめぐる地域神社と共同性

第二章 神社合併と稲荷社

第三章 地域社会の変動と宗教伝統

第四章 氏神鎮守社の再生

第五章 地域神社の遷宮の諸相

第三編 コミュニティの「神」と聖所

第一章 新しい共同体における神社の創建と共生意識

第二章 地域コミュニティを廻る「お燈明」

第三章 地域コミュニティと聖所

第四編 近代神道と地域社会の受容

第一章 地域社会における神葬祭の受容とその展開

第二章 神宮教会所の顛末

序での各編の位置づけによれば、まず第一編では、日本近代以降の神社理解の方向性や「神社」自体の概念形成という問題が扱われている。

第一章は英文論者が初出形態であつたらしく、まず近代日本における神社制度の変遷が海外の読者をも想定して啓蒙的に紹介されている。そのうえで、明治以降の神社調査の実態や、明治初期から末期に至る神社整理において神社の概念が地域住民と施策主体側でどう異なっていたか、などが三重県の二村の事例を参照しながら議論される。

第二章は、明治初頭における複数の神社調べの項目と、明治一二年の神社明細帳の項目を詳細に比較検討し、その時々神社観が反映していることを指摘する。

第三章では同じく明治初期の神社調べについて、旧志摩国の神社に関して遺された資料のうち明治四年（一八七二）の『志摩国神社取調』を分析対象として、主要な項目（社号・祭神・

宗教施設など）に関して包括的な傾向が追跡されている。

第二編は、地域住民にとって神社とは何か、地域社会におけるカミとは何かという課題を、明治末期に生じた神社整理の問題と関係させて実情を明らかにしようとしたもの、であるとされる。

第一章は、初出形態が「絆」を課題とした講座ものだとこのことで、「家郷」を論のテーマに設定し、その観点から地域神社と共同性を捉えようとしている。まず、家郷世界と神社神道との関わりについて鎮守の森が注目される。そのうえで、鎮守のような神社と地域社会との関わりについて、（本書第一部でも議論された）明治初期の神社調べ、地方改良運動、神社整理に対する復祀の動き、外なる氏子への働きかけ、などの諸局面が、三重県の事例を適宜参照しながら概観される。

第二章は、伊勢市内の複数の稻荷社を事例として、稻荷社の造替遷宮、合併、地縁的な奉齋、講や奉賛会のような組織、などについて議論される。

第三章は、サブタイトルにある「名張市における神社整理と復祀」が課題となっている。まず、三重県全体の神社整理が概観されたうえで、同県名張市における神社整理が具体的に表示される。さらに、整理後、戦前において七社、戦後に一九社が復祀したことが具体的に示され、資料的に復祀が確認できないものの、地域社会に神社として遺る二例についても末尾で紹介されている。

第四章は、三重県度会郡御薮村（現・伊勢市）をフィールドとし、同地における神社の合併および戦後における神社復祀、

それぞれの経緯を詳細に追跡し、伊勢神宮の式年遷宮が同地の式年造替に影響を与えており、ひいては復祀の契機ともなっていることを指摘する。

第五章は、三重県下における地域神社の式年遷宮が課題となっている。まず、明治初期の記録により定期的な造替実施例のうち、前章でもとりあげられた御園村の事例に注目し、一七、八世紀辺りを転機として定期的な実施に向かう傾向を指摘する。続いて造替の契機、神宮の古材を拝領する件などが議論され、最後に名張市における神社の遷宮が、質問票によるデータなどによって詳しく検討される。初出形態が科研費の調査報告書であったとのことで、本書の中でもとりわけ詳細な事例分析が行われている章と考えられる。

第三編は、神社が長らくその基盤としてきた共同体の変容という状況下で、共同意識と聖なるものとの繋がりに視点を向けたものであるという。

第一章は、滋賀県の大中の湖と秋田県八郎潟を事例として、干拓地の農村に神社が創建される経緯を追跡している。大中の湖干拓地に関しては形成された三つの集落に氏神が積極的に祀られ、また各祭神が各々のムラの個性を示すものであったこと、対して八郎潟干拓地の場合は神社の創建まで合意形成のために時間が費やされたこと、しかし創建された大潟神社の景観は鎮守の森たりえていること、などが指摘される。

第二章は、第二編第三章と同じく三重県名張市をフィールドとし、「絆」という観点から同市内愛宕神社の祭祀組織、および青蓮寺の「燈明番」に注目した、民俗調査の報告となっている。

る。

第三章も同じく名張市をフィールドに、「まちづくりやコミユニティの再構築という問題」（二九一頁）を念頭に置いて、市内各所の「水神」およびその祭りと奉齋組織を調査した報告である。

第四編は、近代神道の歩みを地域社会における新たな宗教的価値との接触という面から垣間見ようとする内容、だと位置づけられている。

第一章は三重県下における神葬祭の受容をテーマに、同県度会郡大宮町野原（現・同郡大紀町野原）を事例として検討している。野原においては、大教宣布に伴う神宮の教化活動により神葬祭が受容されたが、リーダーシップをとる人物の活動および神宮分教会所の設立、また神社と祖霊社との役割分担などの要因によって、神葬祭が全村に展開し定着するに至ったことが明らかにされている。

第二章は、神宮の教化活動を教会所の消長から窺うという観点から、三重県南部における神宮教会の事例を、前章でも議論された野原の神宮教会をはじめとする数事例から検討し、それぞれの地域社会との関わりに及んでいる。

顧みれば、一九九二年に上梓された櫻井氏の原著『蘇るムラの神々』は、明治末期に行われた神社整理およびその影響に関する研究史において、一画期となる研究であったと考えられる。

というのも、同著作以前の神社整理・神社合祀の捉え方は、

左派的な近代政治史の観点から日露戦後の地方改良運動を、町村を「国家のための共同体」としようとする一種の悪政と位置づける観点から、その施策の一と見なすか（『宮地正人』『日露戦後政治史の研究』東大出版会、一九七三年）、社会学の観点から、村落におけるいわば自生的な祭祀に対する国家からの統制と位置づけるか（孝本貢「神社合祀」、「日本人の宗教Ⅲ」佼成出版社、一九七三年、米地實「村落祭祀と国家統制」御茶の水書房、一九七七年、森岡清美「近代の集落神社と国家統制」吉川弘文館、一九八八年）、が主調であったと思われる。つまり、この政策を否定的に捉えることを前提としたうえで、地域社会の宗教や信仰に対する近代国家側からの統制に力点をおいた捉え方であった。例えば、孝本氏上記論文の末尾には、この政策に対して「民衆と神社とを遊離せしめた」との評価がある。

それに対して櫻井氏前著は、神社整理（もしくは神社合併、という用語が併用されている）そのものの評価はペンディングとしたうえで、森岡氏らが主として依拠した施策側や神社界の史料を参照しつつも、地域社会をインテンシヴに捉え、かつ民俗調査的なデータも加味することで、整理―廃祀の後、再び村民から祭祀されるようになった神社の事例を多く分析し、これに「復祀」という新たな用語を与えたのであった。

この研究の後、神社整理（合祀）の反響として地域住民や神職の動きを対象とする研究が、次々に現れた（喜多村理子『神社合祀とムラ社会』岩田書院、一九九九年、畦上直樹『村の鎮守』と戦前日本』有志舎、二〇〇九年）。この他にも、ロー

カルな神社やその祭祀に関わる近年の民俗研究で、櫻井氏前著は引用・参照されることがきわめて多い（例えば、柏木亨介「ムラの規範と意味づけ」、『民俗学論叢』二一〇号、二一〇五年、渡部圭一「北武蔵の集落神社と神社明細帳」、『埼玉民俗』三四号、二〇〇九年、など）。もともと、喜多村・畦上両氏の著作に関しては、いずれも櫻井氏とは地域社会における宗教文化に対するスタンスが異なりはするが、こうした後続の研究を次々に呼び込んだという点からも、櫻井氏前著の研究史上における重要性を確認できるであろう。

そのように研究史上に確固たる地位を築いた前著に続き、本書では第二編の五本の論考で三重県内に関する神社復祀の新たな事例が検討されているし、啓蒙的な方向性の第一編第一章においても神社整理および復祀の概況が位置づけられている。

ただ、本書は著者自身が「あとがき」で謙遜気味に記すように、「前著の内容を深める方向性ではなく、かなり拡散したテーマの集合体となっている」（三七九頁）のかもしれない。ここでのテーマとは、先にも概観した本書第一編の第二、三章における明治期の神社調べとそこにおける「神社」概念、第三編における共同体の変容と神社との関わりについてのいくつかの事例研究、また第四編における神葬祭や神宮教会所の史的追跡、などを指すと思われる。

しかし、これらを単に「拡散し」としていると理解してしまい、上梓に当たっての著者の「幾分かの気後れ」（同頁）にそのまま納得してしまうのが、本書の理想的な読み方だろうか。

上記の諸テーマのうち評者がとくに感銘を受けたのは、第三

編第一章の干拓地における新しい神社の創建に関する複数の事例研究であった。入植者たちが神社創建に至る合意を形成してゆく経緯は事例ごとに異なるものの、全体としては神社が入植者たちのいわばアイデンティティの表象として求められ、ムラの聖地、鎮守の森となっているという。本書で例外的に三重県以外の事例が検討されている同章において、共同体的な伝統のないコミュニティでこのような形で神社創建が見られるとされることに、評者は大変新鮮な印象を持った。

もつとも、このような入植地という例外的な環境でない場合でも、本書で地域社会の変化が問題とされる第二編と第三編の章では、扱われているテーマが微妙に異なっている。例えば少子高齢化のような社会変化にも拘わらず、任意の神社が地域コミュニティの拠り所として期待され、それゆえ復祀されたりすることもある、という立論の方向性は共通していると思われる。そうした神社と地域社会の捉え方において、また本全体のタイトルにおける「地域神社」というおそらく新しい術語においても、本書は決して「拡散した」論集とはいえないであろう。

ただ、近年の多様な民俗研究の一部によれば、ローカルなコミュニティにおける少子高齢化のような社会変化に直面して、神社が遺された中高年住民層の拠り所となるのではなく、例えば念仏講の組織を合併することを通じて地域意識の再編も行われるという報告がなされたりしている(石本敏也「合併した百万遍行事」、『高志路』三七七号、二〇一〇年)。この報告の事例である新潟県東蒲原郡阿賀町五十島は、阿賀野川流域で藁数

珠による百万遍行事が広範に分布するうちの一事例とのことである。

その意味からすれば、個々の地域社会の変化に対応して任意の神社が住民アイデンティティの拠り所として要請される、という本書の図式を必ずしもステロタイプだと評価する必要はなく、三重県西部の名張市も含めて伊勢神宮に比較的卑近な土地のローカリティゆえ、と理解するべきではないだろうか。そう考えると、本書の第二編第四章における旧・度会郡御薮村の事例で、伊勢神宮の式年遷宮祭に伴って同村でも式年造替が行われ、それが当該地の神社復祀の契機となった可能性があるとの指摘も納得がゆく。さらに、第四編における神葬祭や神宮教会にまつわる事例研究も、こうした独特のローカリティを有する宗教文化の立ち現れ方、と了解するのが妥当ではあるまいか。

ちなみに三重県全体と考えれば、神社整理の時期に内務省出身の知事(有松英義)が先陣を切って、きわめて大量の神社を合併した県であったことが旧来研究でも指摘されていた。

もとより、これまでローカルな宗教文化の研究は、民俗学における重出立証法が典型的であろうが、ナショナルもしくはエスノロジカルな一般化を求める素材としての事例研究、と位置づけられる傾向にあったと思われる。それに対して近年、例えば近世真宗史の領域から、真宗篤信地帯における神棚を祀らない習俗などを柳田民俗学のようなナショナルなモデルに還元するのではなく、地域的な特徴として定位すべきだという提唱がなされている(児玉識『近世真宗と地域社会』法蔵館、二〇〇五年)。

この児玉氏の提唱を考慮すれば、櫻井氏の本書も（干拓地における神社創建の事例以外は）伊勢神宮を有する三重県という独特の場を対象にした、そこでの宗教文化のローカリティを調査・分析した学的営為であると解釈すると、妥当性が高いのではないだろうか。こうした神社セントリックとも称することができるような独自のローカリティを有する地の宗教文化の研究、という視角をいわば縦軸として、社会変化と神社との関わり合いへの関心を横軸とする本書は、その交点において高い学術的価値を有していると評者は考える。

最後に、学術書の出版が厳しい昨今、美しい表紙カバーをはじめとする立派な装丁で、しかも内容の質量ともの豊かさに比べて格段に安価な刊行を実現した出版社も、称賛に値するだろうと付記して、拙い書評を閉じさせていただくことにする。

板井正斉著

『ささえあいの神道文化』

弘文堂 二〇一一年六月三〇日刊
A5判 iv+二三五+ii頁 四〇〇〇円+税

黒崎 浩行

本書は、現代日本社会の喫緊の課題として「新たなご縁や支え合いの形」を掲げ、そこに「神道文化」の役割を見出すための研究視点の創出をめざして、関連諸分野における研究の博搜と、独自の実証的な調査とを重ねてきた著者の研究成果が一冊にまとめられたものである。第一部「神道文化と現代的な社会課題をめぐる研究視点」、第二部「障害者・高齢者の伊勢参宮とそれを支えるボランティアリズムの相関性」、第三部「ささえあいの聖地へ」の三部構成となっている。

第一部（第一～四章）では、「神道文化」と現代的な社会課題とのかかわりがこれまでどのように論じられてきたかをふりかえりつつ、その蓄積の不備な点を析出し、これからの展望を提示している。

第一章「神道文化に基づいた「地域・福祉・文化」研究の特質」では、第二次世界大戦後日本の社会福祉において、国際的な価値理念の変化や国内的な政治経済状況の影響のなかで、「地域福祉」の推進や「福祉文化」の創造が提唱されるように